

共通1次試験制度に参加している4年制国公立大学及び私立の産業医科大学（「大学」という。）に進学する志望をもっている者（「志願者」という。）が大学に入学するまでの過程は、志願者側が行う進路選択と大学側が行う選抜とがからみ合った複雑な経過をたどる。それを簡単に述べると以下になるであろう。

まず、大学側からみれば、①募集要項と受験案内（国公立大学ガイドブックを含む。）の発表及び交付、②共通1次試験の出願受付、③試験の実施、④採点と全国平均点等の公表、⑤各大学の2次試験の出願受付、⑥各大学に対する共通1次試験の成績提供、⑦2次試験の実施、⑧採点、⑨合格者決定（合否判定）、⑩合格者発表、⑪入学者確定というのが一般的な過程であるが、そのほかに、推薦入学（共通1次試験を課す学部と課さない学部とがある。）、2段階選抜（⑥と⑦の間で共通1次試験成績等によって選抜を行い、その合格者だけに2次試験を実施する。）、第2次募集（⑩の後に、共通1次試験受験者中の国立大学不合格者を対象とする募集を行う。）など特別な選抜方式も行われている。

また、受験者側からみれば大学受験の過程は、①志望大学・学部の選択、②共通1次試験出願、③受験、④自己採点、⑤2次試験出願、⑥受験、⑦入学手続（合格者に限る。）という経過をたどる。この間に①の段階における志望大学・学部の選択と⑤の段階直前の志望大学・学部の変更という進路選択のほか、受験の放棄（欠席）や入学手続の放棄（入学辞退）という形での選

択が行われる。

なお、ここで大学側というのは各大学及び大学入試センターを指し、受験者側というのは受験者個人のほか、進路の指導と相談に当たる家族や高校教師その他を指している。

以上述べた過程を54年度から57年度までの統計資料によって説明してみよう。

我が国の18歳人口の9割弱に当たる130～150万人が高等学校を卒業する。その卒業者の約32.3パーセントが4年制国公立大学への進学を志願するが、その約半数すなわち高校卒業者の約16パーセントが共通1次試験に出願する。共通1次試験の出願者は高校卒業者のほか既卒者（いわゆる浪人）約11～13万人と大学入学資格検定合格者、高等専門学校3年修了者、外国の学校卒業者等約1,300人を合わせて34.5万人に達するが、その中の約27パーセントが大学に入学し、約50～60パーセントが選抜の結果によって、不合格と判定される。試験の欠席者、2次試験出願を取りやめる者及び入学辞退者は13～24パーセントを占め、微増の傾向を見せている。なお、共通1次試験参加大学間で出願先を変更した者はこの数に含まれていないので、その数や国公立大学を最初志望していたにもかかわらず共通1次試験に出願しなかった者の数を考慮すると、志願者側の選択による進路変更の割合はかなり高いものと思われる。

さて、入研協を構成する全国立大学の入学者選抜方法研究委員会及び大学入試センター研究部において行われている研究の動向を概観するに当たり、入学者選抜に関する研究、進路

選択に関する研究及びその他の研究の三つに分類して述べることにする。なお、それぞれの研究の動向は、「主な研究テーマ」において詳しく扱われており、ここには該当するテーマの番号を()内に示す。

入学者選抜に関する研究

大学側が入学者選抜を行う際に用いる資料にはA高校調査書、B共通1次試験、C第2次学力検査、D実技検査、E面接、F小論文、G健康診断などがある。

さて、入学者選抜は次の三つの要件を備えることが要請されている(「大学入学者選抜実施要項」による。)。

- 大学教育を受けるのにふさわしい能力・適性等を備えた者を選抜すること。
- 公正かつ妥当な方法であること。
- 高等学校の教育を乱すことのないよう配慮すること。

上記の各種資料が上の三要件を満たしているか否かについて検討するため、どのような研究が行われているかを概観してみよう。

(1) 選抜資料に関する研究

大学教育にふさわしい能力・適性とは何かという問題についての研究は後に取り上げることにして、一般に能力・適性の指標として用いられているのは、選抜時点においては合否判定そのもの及び合否判定の資料である総合成績である。また、入学後の時点においては学内成績、教師による評価及び学生の自己評価、大学卒業

後の業績(例えば医師国家試験の可否)等である。これらの指標との相関や関連(例えば合格率の高さを比較して関連を見る)などの研究が数多く行われている。(1, 2, 3, 6)

選抜資料が公正であるか、また、妥当であるかという点については、各種資料相互間の相関や関連の程度の研究、受験者・高校教師・有識者に対する意見調査などが行われている。(1, 8)

高校教育に対する配慮については、上記の意見調査のほか、高校関係者との懇談会による意見交換などが行われている。

次に選抜資料のそれぞれに固有な問題に関する研究を列举してみると、概略次のとおりである。

高校調査書 — 学習成績評定の学校差及びその補正方法、行動及び性格の評価と面接・小論文との関連。(2, 3)

共通1次試験及び第2次学力検査 — 試験問題の難易度・識別性、マークシート方式と記述式の比較、得点分布と得点変換(偏差値化など)、選択科目間の難易度の差及びその補正方法(1, 7, 8)

実技検査 — 各種選抜資料及び入学後の学内成績相互間の関連は研究されているが、それ以外の研究が少ない。

面接 — 面接者の研修、個人面接・集団面接・課題作業後の面接等の検討(3)

小論文 — 採点者間の差、出題方法の検討(3)

(2) 選抜方式に関する研究

一般的な選抜方式と特別な選抜方式に分け、前者から述べることにしよう。

進路選択に関する研究

一般に、合格者を決定するために上記の各種選抜資料を総合して判断を行うわけであるが、その際に各種資料に与える重み（配点比率）が重要な問題となる。これについては多くの大学が研究を行っており、その主要なものは次のとおりである。

配点比率を変更したと仮定した場合の合格者と不合格者の入れ替わりの比率、入学後の学内成績を指標とする配点比率変更の効果予測

（ 1 , 4 ）

2次学力試験の出題教科・科目変更前と後との入学者の共通1次試験成績及び学内成績の比較（ 6 ）

次に特別な選抜方式について行われている研究を挙げてみよう。

2段階選抜 — 第1段階の選抜の際に、募集定員の何倍までを合格させたらよいかという適正倍率の検討（ 4 ）

第2次募集 — 第1次募集出願者と第2次募集出願者の共通1次試験成績の比較、合格者についての同様な比較、辞退率・退学率・学内成績についての比較、入学者の意見の比較（ 4 , 6 ）

推薦入学 — 推薦入学者と一般入学者の調査書、共通1次試験及び入学後の成績の比較、職業科高校出身推薦入学者の実態の経年変化（ 4 , 6 ）

海外帰国子女の特別入学 — 教官の意見の調査（ 4 ）

社会人入学 — 入学後の学内成績に基づく一般学生との比較（ 4 ）

志願者側の進路選択については、大学側が直接関与することがなく、またそれについての情報も乏しいので入学者選抜に関する研究ほど活発には研究されていない。しかし、入研協としても次第に関心を高めている研究領域である。

それは高等学校の教育目標の一つとして掲げられている「社会において果たさなければならぬ使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ……」（学校教育法第42条）ることに対して、大学側が果たす役割とその影響によって生じた結果を解明することである。

大学側の役割としては、志願者が進路選択に当たって大学・学部の特性や大学卒業後の社会との結びつきを正しく理解できるような情報を提供すること、適切な進路選択を助長するような選抜方法を工夫すること、入学後の学生生活に生じる不適応と進路選択の関連を明らかにすること、未熟な進路選択者であっても入学した以上自信をつけさせて個性が発揮できるよう指導することなどがあるが、最後の項目は大学教育そのものの一部であるとも言えよう。

上に述べた諸項目について実態を解明し、大学側がとった措置の影響を評価するために次のような研究が行われている。

進学意識・志願動機 — 一般高校生・受験者・入学者に対する調査（ 5 ）

共通1次試験制度実施に伴う受験者層及び合格者層の変動 — 高校成績、得意・不得意科目、出身校の地域・課程・学科等の分布、男女比・現役対浪人比などの変化の研究（ 5 ）

共通1次試験制度以後の大学生像 — 学生及び

大学教官に対する大学生像の調査（５）
２次試験出題教科・科目の変更に伴う受験者層
及び合格者層の変動—共通１次成績，得意・
不得意科目の分布の変化の研究（５）
自己採点の正確さ（８）
進路変更者の進路と進路変更の理由 — 入学
辞退者などの調査（５，７）
転科・転学部・転学・留年・休学・退学と進路
選択 — この問題は主として学生相談関係者
によって研究されているが，進路選択や選抜
方式との関連について入研協においても研究
されている（７）
入学後の意識の変化 — 学習意欲・職業観（例
えば教職観）の変化の調査（７）
（選抜方法の改善に関する研究について前で
取り上げた項目は省略）

その他の研究

大学入試を学校教育全体の中でとらえる場合
高校教育との関係や大学教育との関係が重要な
問題となる。また，入試及び追跡調査にかか
わる情報処理体制の整備，入試制度・方法に関
する情報収集の充実なども重要な課題である。
これらの問題については，次のような項目につ
いて研究が行われている。
大学教育と大学入試 — 大学・学部の教育目的

からみた望ましい能力・適性，入試と一般教
育の関係（８）
高校教育と大学入試 — 大学側と高校側の懇談
会による意思疎通（８）
入試及び追跡調査の情報処理体制 — 電算機に
よる情報処理方式（９）
入試制度・方法に関する資料収集 — 国内及び
外国の入試制度・方法に関する情報や研究成
果の収集と分析（９）

今後の研究課題

入研協として今後一層力を注ぐ必要があると
考えている研究課題は，次のとおりである。
学力以外の能力・適性の判定法 — 面接・小論
文・実技検査・調査書の活用及び改善と入学
後の追跡
特別な選抜方式の効果 — 推薦入学・第２次募
集その他の方式による入学者の追跡
大学・学部の特性に対する志願者の理解度とそ
の促進
進路変更の実態と対応の方法
大学・学部にあふさわしい能力・適性の解明とそ
の評価方法（学内成績の評価法を含む。）
不適切な進路選択によって生じる大学生の不適
応の実態を，高校側の進路指導にフィードバ
ックする方法